

復興信じ 校歌の一節

居酒屋の高校ノート 2千校目は宮古高

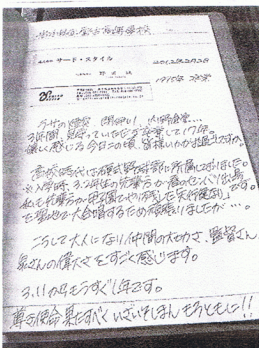
薄暗い店内に、高校名の入ったノートが並んでいる。訪れた客が母校への思いをつづる「高校よせがきノート」。新橋にある居酒屋「有薫酒蔵」の名物ノートが2月、2千校分に達した。2千校目のノートを作ったのは、東日本大震災で被災した、岩手県立宮古高校の卒業生だった。

新橋の「有薫酒蔵」

JR新橋駅・日比谷口の「帰ろかな」「転職した近く。サラリーマンにきい」。同窓生に向けて思いをつづったノートは年々とも増えていった。

カウタンに座り、おかみの松永洋子さん67に尋ねた。「若手県立宮古高校のノートはありますか？」

「棚には1999校分のノートがある。25年前、福岡出身の常連客が「上京した者同士が近況報告できる手段があれば」と冊子を置いたのが始まり。「田舎に宮古高校なら、震災のこと



2千校目となった岩手県立宮古高校のノート。野田誠さんは最初のページを校歌のフレーズでしめくつた

「読めばみんな分かってくれる」



おかみの松永洋子さん。「有薫酒蔵」には、客が作った2千校分の「高校よせがきノート」が並ぶ＝港区新橋1丁目

もぜひ書いてください」30分が過ぎた。男性が書き上げたページには、甲子園を目指して頑張った野球部への思いが込められていた。客が、震災については「3・11からもうすぐ1年です」とあるだけだった。

「すみません。ベンを握ったら、何も書けなくて。でも何を眺めれば、みんなは分かってくれます。そう言って、最後に記した一文を指さした。

「専き使命果たすべくいざいしめんもろともに」

仕事を終えた松永さんがインターネットで調べたところ、それは校歌のフレーズだった。

「復興への思いを校歌に重ねたのだろうか」と、松永さんは思う。2千校目のノートが棚に加わった。

「でも、夢はかないませんでした」と、野田さんは振り返る。社会で野球が4年間ブレイクした。だが不況で休部した。野球をあきらめた。外資系の生命保険会社に就職。知人2人で独立したのは33歳の時だった。あの日、津波はあつたことを飲み込んだ。海岸の近くにあった実家は流され、3人の親戚と3人の友人、知人を見失った。ガリリンを讀んだ。盛岡からがれきのたの1週間後、がれきの中で途方に暮れた。

「の迷っていったとき、ふと校歌が浮かんだ。「パンカラな校風だったから、そらんじるほく歌わせられたんです」

この夢は会社を大きくする。今、東京にも進出した。い。そして、ふるさとのために微力ながらも貢献できれば。

専き使命果たすべくいざいしめんもろともに。必ず復興すると、信じて

(三沢敦)